特別展

慈愛の造形「木喰の微笑仏」

'97年12月2日[火]—'98年1月25日[日]

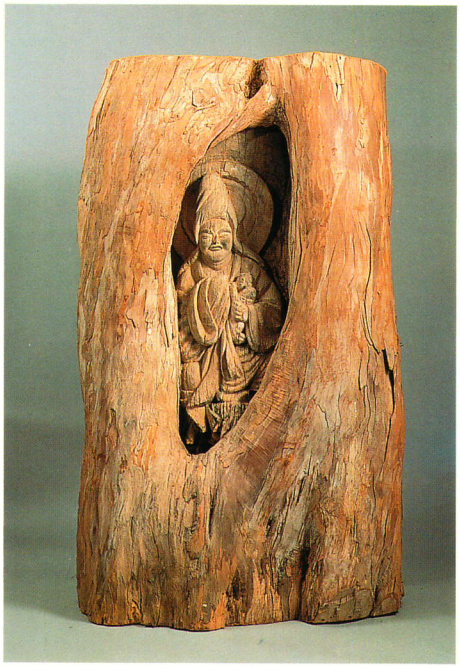
■開館時間＝午前9時—午後5時［入館は4時30分まで］
■休館日＝12月8日[月]、14日[日]、15日[月]、22日[月]、24日[水]、29日[月]
～1月3日[土]、5日[月]、11日[日]、12日[月]、16日[金]、19日[月]
■入館料＝一般300円／小中学生100円
65歳以上の方及び障害者の方は無料
■主催＝渋谷区立松濤美術館
朝日新聞社

渋谷区立松濤美術館
〒150 東京都渋谷区松濤2-14-14
TEL.03-3465-9421

「千手千眼観音像」小栗山木喰観音堂（新潟・小千谷市）

慈愛の造形「木喰の微笑仏」

「自刻像」陰涼寺（京都・八木町）



「子安観音像」光明寺（愛媛・伊予三島市）

かつて五穀を断って木実を食する木食（もくじき）行という厳しい修行があり、その行者は木食と呼ばれました。木食僧には各地に修行して素朴な仏像を彫り遺した者もいましたが、中でも口（くち偏）を付けた木喰（もくじき）の名で親しまれている行道（行道は得度時の名、後に五行菩薩と名のりを改め、最晩年には神通光明明満仙人とも自称）は、日本各地をあまねく廻（めぐ）り歩いて多くの仏像や書画を遺したことで知られています。

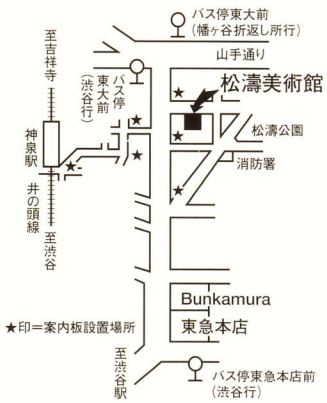
木喰は江戸中期の享保三年（1718）に甲斐（山梨県）の貧しい山村に生まれ、二十二歳で出家、四十五歳の時に木食観海上人から木食戒を受けています。五十六歳から日本廻国に出立し、文化七年（1810）に九十三歳で没するまでの後半生のほとんどを旅に暮らしました。六十歳を過ぎてから仏像を彫り始め、八十歳で千体仏の造立を発願。以後十年ほどの間に代表作を各地で次々と彫り上げています。

旅の僧であった木喰がわずかな道具で短時間に彫り上げた仏像は、専門仏師の仏像のような表面の仕上げをしていない、いわば素人の造形ですが、金箔に覆（おお）われた伝統的な仏像には求めることのできない温もりと、修行の果てにたどり着いた厳しい宗教的境地が滲（にじ）み出ており、一般に沈滞していたといわれる江戸時代の宗教美術にあって、独自の光彩を放っています。同じ江戸時代の造仏聖として評価の高い円空（えんくう）の仏像が直線的な切れ味を見せるのに対し、木喰仏には丹念に彫り込まれて丸みを帯びたものが多く、木喰の温かな人柄がそのまま表れたような微笑を浮かべていますが、それを守り伝えてきた各地の人々の純朴な信仰も、そこに読み取れるように思われます。

この展覧会は、八十歳以降の円熟期の作品を中心とした百二十点ほどによって、木喰仏の世界を概観しようとするものです。

「葬頭河婆像」東光寺（兵庫・猪名川町）

■講演会――1月10日（土）午後2時～「木喰仏と近世の仏像」
跡見学園女子大学名誉教授　三山　進

■美術相談――12月20日（土）午後2時～4時　相談員：磯村敏之（油彩）、松島靖（水彩画）
1月25日（日）午後2時～4時　相談員：佐久間公憲（油彩）、戸田康一（日本画）

■美術映画会――12月23日（火）午後2時～3時
「国宝　中宮寺・広隆寺」「国宝　東寺」
1月24日（土）午後2時～3時
「国宝　室生寺・神護寺」「国宝　十一面観音」